權大納言政爲卿着到和歌

特別
へ4
8218

ハ4
8218

内裏着到百首和哥　文亀三年九月九日

春二十首

歳暮立春

行しをしふえたてはあて春乃光とをさまる御代かな

山霞

山風はをさまれるとも中の夜をそらにかすみよ

海霞

たゝみそのふむをみるたり新の松ちまつちさしらん

鶯巣鶯

かつらわかとふかすとたり鶯かすかの松のかねつきされ

澤若菜

春さむき山沢水のとけぬまもかつ野へ[illegible]わかなつむ哉

松残雪

雪はまたはらにこへて松のやまのあへぬ雪もさえけん

庭梅

まかひもえ見えてゆかりさく梅の花色のなかはしはたの

野梅

ふれはよもの[illegible]かに[illegible]にほひも[illegible]梅のえをしのひて

湖柳

むかしをそうつす[illegible]ふかく柳の枝のしつれけり

暁春雨

西のうちよのまつあかつきの春雨の音もそなたにかねさめん

春月

雪とみれはなかの月影のまたはあからにかすみ

暁帰鴈

春なからかへる雁かね夜ふかくもかすみのそらのあはれなりけり

待花

花のみやさこそはまちけれ世中に散るをしらねはまつそうき

尋花

とはん花はありとはなけれゆくへともしらぬ山ちをたつねてそ見る

見花

をりしつめられぬ花の色ことにむかふ心をかさねてそ見るのとけし

折花

ちるまてをみんとおもひし人のためおりてそかさす花のえたかも

惜花

さくと見えあかぬいろかは根に帰る花のこゝろをとへはいかゝ

里款冬

山吹をよそにかさしてもやさすかなれといとゝ宿のかきねなる

池藤

影さしてゆるゝみなそこ池水もむらさきそふる松にかゝれる藤なみの色

暮春

花みちるはるとてあそふ日数をもそへたのまれぬ暮をおしむもうし

夏十首

里卯花

卯の花の深山の里のゆふくれは月まつよりも雪かと思ふよ

挿葵

あふひくさ二葉なからも神のしるしかけてそたのむちはやふる

枕郭公

夏はいふかたそ秋のすゝのとなつくさはゝなるらむ

聞郭公

来よとふ山はなる声ふてこめしおとうや海をわたりてなん

思郭公

むかしきすきてもあるさすなす思ふすゝめく雲井のあけほのは

五月雨久

雨水まされはせ出ぬに流くまていく日もる庵ん五月雨のころ

田邊螢

よふかくて草にまかれてたのもとにうつる光の風よりやとふ　夕暮

浦夏月

こぬ秋を浦ちの月よみ舟さえなくと秋の露ふらんしけし

水邊納涼

むらさめのあとゆふたちはましん水のいのちに流れゆとも

遠夕立

六月やそらの雲の峯高くおほつくに稲葉そよく秋風のうら

秋二十首

早秋朝

こよひたつ秋風のと顔に招くいちはすゝしく露の玉に

七夕秋深

逢ふてまたあすのよたかふへきさに天の河ねやゆく秋やかそへん

野萩

いさ中はいとゝあはれなる露よりも色をふかむ萩のうへ　うしきよ

森風

なをとふく人かをすみつふゆゑかへはす萩の下枝

薄霧

末葉さへ[illegible]の露の袖見え[illegible]

夕鹿

こゑ[illegible]すゝき[illegible]物と[illegible]

初雁

[illegible]月[illegible]

草虫

うら[illegible]の[illegible]

河霧

河つらのさゝ[illegible]の秋風[illegible]

秋田

[illegible]

禁中月

[illegible]

秋頭月

世をてらす[illegible]月[illegible]

古寺月

[illegible]山月[illegible]

山家月

深山[illegible]すむ[illegible]月[illegible]

閑居月

秋の月[illegible]

隣擣衣

うち[illegible]衣[illegible]

岸菊

うつろふとわかてこそ見つきく花の色やはかはらぬ下水

嶺紅葉

うすくもみねのあらしのやまかせに紅葉のちりかう

谷紅葉

いかにみんたにの戸のゆふかせの秋のくれ

九月盡

ちれわんとしいつの年も秋の露けくも袖を思ひわび

冬十首

行路時雨

ゆくも袖のぬれまさる旅のよそにゆく

橋落葉

寒草霜

ちりはてゝあきのゝすゝきの草のさかりも

かれしかは霜にくちぬるはなのいろ

湖氷

さゝなみやしかのうらかせにさえわたる

冬月

さえわたる月のかけにみえてや

濱千鳥

夕されは友よふ千鳥なくなりて

湖雪

夕雪

きのふまて雪けの空を湖の山の

ありけりなはやみせて愚深のしらりしてぬる風家かな

夜雪

雪の日はしつもるおとも夜なから降りまさる山嵐ふく

歳暮

身よりつもりて世をしらすくれはてたりや年もくれなん

戀二十首

寄山戀

かれなりし袖の露をは山つれなくもなけや涙かな

寄嶺戀

我中よしみねのつゆやまくさめてかれなん

寄杜戀

秋風のさそふの杜のこすゑにもみちの

寄關戀

心とも人にうちとけ折ふし見るかりかねて此たれ

寄思戀

思ひわかれてもいふかひなく思ひの草葉の枯れなの

寄野戀

あさちふの野へにさかりにつれなく折たの露や

寄原戀

身の秋に忍ひかれてつれなくもつみそへて見ん

寄河戀

うちけり我もまつ涙やつゆの袖の水かな

寄江戀

まひかいさや入江のみつの浮身もかなし

寄沼恋

あらはれぬ恋の山たかミいつか沼はいつか海となるらん

寄澤恋

あさましとさえめの澤の人いまも袖の人よそにしもをや

寄池恋

うらみしや人をたのむの池水のあはれ中々ちるや常

寄瀧恋

それ人の瀧の瀬の声まさりやはなやかしか袖の山

寄橋恋

埋木はうちにしけれとあまや橋の下なまし

寄海恋

恋ひゝとそ忘るゝ袖の海よりも袖にあま渡の松の人か

寄浦恋

うにかくはれのうみにたりふをあゐて袖の浦もつれなし

寄濱恋

つくてもきて行方知らぬあまの浦のこゝろ海

寄湾恋

あはれとも子代思ひ路のうれあまをすこさぬ我かはこそ

寄湊恋

人事の母のためはもし人の思ひさめ夢を見より

寄鴻恋

せくかはゝをせて瀬の川きまてあせて袖のみたれとまる

雑二十首

暁寝覚

猶さめぬ心のうちに世の中をおもふもつらくとかく世の中

谷松年久

年ふれは谷の松も埋木となりにしを世の人はしりもこそすれ

籬竹

ひとむらの竹の葉しけくそよぎつゝ籬をこして外に風吹く

路若

むかし若草ふみわけしあとのあるこそやさしけれ

葦間鶴

夕暮の入江にたてる葦間にはたゝ鶴の声のみそするうらさひし

羇中送日

旅の空に日数ふる身の限りなくみやこのかたそ恋しかるらん

羇中懐都

波の上に浮寝する夜の長き夜の旅寝の空はいかにかも

旅泊重夜

かくしつゝ浮寝をすなる波の上に我身をうきて一夜二夜と思ふらん

海邊眺望

おのつから浦の浜風吹きぬれは沖つ白波めに見えて

寄夢懐舊

わすれにしむかしの夢を見てもかく昔の夢はうつゝなるらん

寄光懐旧

つらきことをはかなく思ひつゝ昔の光をおもふなりけり

寄世懐舊

うき世をはいかにせよとてかくはかり世をうしとのみ思ふらん

寄情述懐

三つの字しこきをかなとつかすの世のためにおるみなもと
いへ

寄湖述懐

みなもとは湖のそこにかすみんであるともあきのかげ
こなりよ

寄身述懐

そのかみやとてわりなきつよたりともさすまん
あらうし

寄榊神祇

あまもとやおいとさくてのこさむかゆかしのちぬ
地はしら

寄鏡神祇

秋津洲の内かと晦りな鏡くもりなき郭のてらす
と代天照

寄水人教

みえなくなみは江のみなもとに祈る身をさすらよる流やあらと
たのすん

寄燈人名

風のまよりはるかに照らす大内の光を添へて心残
くら

祝言

たまてらす世より神と代まの道すまるる歳気
めくみんを

侍従大納言家(實隆卿)千首着到和哥之内

永正元年三月三日

春二十首

立春

わかれぬる年をまくらにゆくへやゝそふ花のまちかねて　立ちかへる

霞始聳

あまのはら へかさなりけるか朝霞まだ立そめぬ人の心を　立ちかへる
一本 時拾遺抄 文傳卷七 御詠

原若菜

いまもかくしのはしきまつ山のはの雪のめく　見え

庭残雪

庭のおもにひかりのこるあれやたか庭の雪の　ちさき

鶯為友

ふくかせにさそはれきつるふるさとの梅のあと

見梅

風の上よりまたさかりに梅の花の香こそ袖のうへにしれ

渚梅

よるなみてやうきをのうへの香のみえてこそまつとそ梅　うつす

堤柳

ひとしほをそふる柳の糸をたえてよりの水の堤よ

春雨

かすみたなひきてしつくもしたゝる梅さらん春にこそあれ

早蕨

やまかけのかをのひとりまたゆかむ物をし雖はいさめん

花

三

侍従大納言家實隆卿千首着到和哥之内
永正元年三月三日

春二十首

立春

わかれぬる年をまくらにかはるやと花なきのまちえ立ちぬる

霞始聳

あまのはら色さらけなく朝霞まかせてのさそ立らん

一千時拾遺補文傳巻七御詠ニ

恩若菜

紀まかひよるしまかつむ山かけのつまのゆくえ

庭残雪

庭のわりにのりのかわりやたつきかね雪のおきてし

鶯鳴夜

おくさめて常のにきは色の人あらはるし花のあとと

見梅

風の人よ切来武わりふ梅の花さへ袖の色れ

津梅

よみかてやうきよをれんちみえ舟こころとまりと梅かすゝ

堤柳

ふしかきらすきさうの柳のまをもくてりぬ水も堤よ

春雨

かきたなみわたるしさひてしば毎のいきん春てこれかれ

早蕨

葉かたふのさのかけひりしをわかれかわの柳さしにいさかん

花

暮や我もうらみし事の世よりふかきは花ぞ見てまし
いはくもくいつみの花のなかりし日かたまかきと嫌ん
立出しくれの木陰を見る人の多くの梢の山風ぞうき

湊帰鴈

たちわかれいかなる雲のうへまでも風のたよりそひてなきゆかん

春月

暮の空かすみやはてゝ月まちし[illegible]の山に出てぬる

暮霞

今よりの世をかすみても春の色深くなれゆく暮の[illegible]

喚子鳥

山吹をかこちてさへも声の代くなりにけらん

款冬

暮の花みな散とめよ吉野のいさゝ山端にかゝる雲も哉

浦躑躅

浦風に波よりかゝる松の下折しくつゝじかくす浦の道

暮春雲

今日そ世の春もかきる[illegible]雲の残して見えん人もなし

夏十首

卯花

深山木のたかねは雪の卯花もてりぬ月もかくれ雪や

郭公 二

人まちに待くてきゝし一声も我あかれなれ時鳥の声

雪ふりし山にぬれつゝ[illegible]

橘

ふる世をも長きかたにそ結ふなるいはよあまたかのこゝろも

早苗

よる浪えみつのよとの水風に人よさなへの数ゆくらし

五月雨

ともすれはくちなしのよの五月雨に世よりもことに文月の色

蚊遣火

我宿のかやりも煙にたちなひきくはゝるにほひたえぬまかい

夕顔

物ことにゆふ露とふかほの花を人よりまつなれなすの

夏月

月よさへいかにもとの窓こえて方よりいつかたの数の
あやしき

はらゝのころ秋やをこて志見えねと鳴露の葉かたとたえ

秋二十首

立秋

露の方さえそよきのはてとあさちか原の色をきの上風さやかなる

萩

萩似人来

萩すく風よりおとせぬ萩とう人よ思ひのたえまけ
まつは

朝萩

下萩のまたねやねらく花も下枝のわすれて露のはし

女郎花

をみなへしかたくしけにかれは秋風にそふらんとも

薄散

よをさめの袖のまれみやつゝろ風にさえしくちらは

露ぬむ

おほかたの秋の露よりさく砂の浜の花もくさ

虫近枕

秋風のすさへるねよ鳴る虫の声ありぬ

林鹿

深く入山の庵の鹿の声つきとめ[illegible]またたてを

秋夕

雲きりもいまは[illegible]見へて梅の秋草 光誉

月 二

よもすがら[illegible]月をも持まくら

[illegible]月のかげ露や袖[illegible]

右石関鷹

枕まくら[illegible]

鴈霧

[illegible]秋霧の[illegible]

池辺菊

[illegible]

擣衣不眠

[illegible]

月

[illegible]月の末の秋を

思葛

[illegible]

紅葉一樹

[illegible]

よろつよのもみち葉をはらふ木からしのあきの山かせ　あらそれ

連峯紅葉

嶺紅はくれなゐのみねをつらねてまかふらむ　やいこん

暮秋雨

かこつあきそ[illegible]のなことし雨吹たる今日秋也

冬十首

時雨

いつしかとふりそめぬるしくれ雨秋の色に袖はたもらん

落葉

紅はちる木の葉の色もまかふらし梅に風ふく　た寄

残菊

秋の月影のゆくへやたつねまし霜にのこれる菊の色　らん

氷

ゆくかたの池のこほりをとちてけりむかしのそらの水音

千鳥

さゆる夜の[illegible]を思ひてさよふけて物思ふ　とふ人

水鳥

すむ池のとふ[illegible]の水鳥のなかにはよるのうきや[illegible]

鷹狩

みかり衣すそ野にかゝる[illegible]の袖や[illegible]らん

雪

人はいさわかことゝ思ふにはかた[illegible]の香[illegible]

炭竈

すみ竈きのいかにけふりやゆく[illegible]

歳暮

立帰りくる年もたのむことよりはやて年をおくらすもがな

恋二十首

不見恋

あはれしなそれやみるめもなき我かたにかゝるたのみぞなき

聞恋

音に聞人をそれとこそ思ひよそへてすぎにしをいかにすや

待恋

頼めつる我さへよしや中々の月やく物を思はせん

後朝恋

暮さへ又うれしいかにおもふらんまちしあけぼのとしもや

近恋

なかなかやつゞきもまさん我よそに世のあはれなる

遠恋

雲ゐかけ見ゆつらきよしや方にの花のうつゝ見えて

悔恋

あはれまたにおもふにをいふ人にゆく方もやと見ゆ

隠恋

まつ袖の涙をとゞめずなることしのぶれば

久恋

つれなさ年月代りゆくよおもひ中にやむ

絶恋

我とこそ思ひきりきしいのちなくへうつれゆく

寄煙恋

鶯のたにのとやをいてぬるもさえしやまかくれの庭の雪かな

寄谷恋

くち(?)はてゝきえなましものを人忘れぬ夢のうきさまにかは

寄河恋

瀬川のみつしらぬゆかはにもえこそわたらねおもひたえたく袖の色こそ

寄家恋

みなあるはまつの[illegible]柱ん抄ふる涙のなかの海の底の

寄竹恋

節はよもつくかゆくかきくさしきしかまへしやまつれとも母

寄木恋

つれなさを我のみしるやそのこすゑにかけておもひのたえぬ色

寄鴨恋

深き江に[illegible]かくれてよるのなかをすきにしものを

寄鏡恋

我ならぬ人のかけをもうつさしとそれ[illegible]

寄鐘恋

まれにあふよはいつしかとまつ[illegible]

寄橋恋

[illegible]

雜二十首

釋教

三世の[illegible]

曉

うちつけに[illegible]

畫

きけんみゝ見よめくらはの亂いまし河ろゆめはな　ようひつ八

をりふしよの命つゝし墨染の女をいさの神そ

山　三

花ゝを見れはちりせぬ山や山のうちあり

つらぬくいよ世をかけて住山の雪しくや松らん

あらまし山をふかくけれそはちるふ花のえ

河

ほそしめたえぬ流のゆきて雪りの水に

橋

あ風にさと世さそへよみやとも方に橋落

御

うき世みみな思ひをすてゝ住はさとみちの

山家

住と世の人は住む山林の事をすつ秋の里

田家

みな入のさ雨に鳴のすゝしく雨の床のかは

竹

くれたけの世をうきふしくらまも世やをりの根

鶴

我のさとにをりゐる霧の鶴の見えむかうしや池のみ

猿

海山をかけて猿の声たかくあらはやま梅

漁
うき身よあまのつりふねなすらん世をわたりてやそ
きえぬる

夢
なからへや誰にかたらむ手まくらのいさめし夢の
うつゝも

懐旧
世のうさは代々のならひとおもへとも昔の代々はまさり
けれん

述懐
うき世の身には何事かあきらめむ世の思ひとそいはれぬ
ものを

祝
君か世も千代まてや万代かけん流るゝ千代の世に
たのしみを

内裏着到百首和哥　永正二年三月三日

春二十首

鄰郷立春

あつまやのとなりの郷も春やたつ霞の香の梅かえ　志らか

子日催興

二葉よりきみとちきるや松かえのちとせの春をさそふ野の　日ん

遠峯朝霞

跳らてと路んこ嶺の雲かすみんこのさゝのをてもいむ　よらを

竹亭聞鶯

手鶯行の緒よ千世のちはのたとえまれて紅や鶯羽

深渓餘寒

苔むしろ春のつて氏は所かうてとふ谷の風のひきさ

江邊若菜

つみおきて代々の千代やあれと川水もしもまつあふ梅杯　をりしハ

寝覚梅風

あさけく枕露乙しかこりあふか袋をとは春さ　そら香風

遠浦春曙

みなといりの浦もさすらかへやかすみの浪まよの　明わたの

幽栖春雨

よもすからふかくもあらぬ雨のさかせて人の心やそる　さる

月前帰鴈

かりかへるつもをかすむとそいことゆか月のた　つり令

樵路早蕨

つま木をもしはすてたて山人の心をうつしてさわらひの　早蕨

堤柳蔵橋

あを柳の糸にかすむ色よりも浪やかゝるみゆる橋の かけて

對花恥老

つれなくもとしへてみん花はうしわるゝ花よりも 折りつらん

花落客稀

花ちれはとふ人まれにとかく思ふこそそよ梢には 残りけん

晴天[illegible]

なよ竹のよはの糸ゆふ空の色もわかぬ霞のうちにこそ 松翁

雲雀消霞

かすむ江のなにもみえぬ雲雀の声はかりとはさえぬたよりかな かすめる

雨後苗代

毎日の山のそなかの雨けふはくかりのかはらを田まもり

瀧下藤花

落たきつ岩ねのかけの藤なみのそよくまてにさく花 まさり

數盡款冬

山吹よみやこをさかぬ露のはなまてにいふやくるまのかはらの あれ

惜春雅一

今日のみのくれなはありともはなにちるへきたてもちるかな ましたら

夏十五首

山家更衣

里はさくらの花なきをきたる人とそおもへはあかしのかさ 衣かな

卯花似墻

折りてみんなをたに植てかきねの花をやおりやみけ

夢中郭公

ほとゝきすやまつ待ぬ夜をえしてきゝかすかに山ほとゝきす 宗祇

画橋菖枕

あちらふやかたをかりにけふ枕とよそにおもひけり さはかん

古池菖蒲

池水にひかるあやめかさねてそのさ月とも世をしらず

薄暮早苗

入まてとこかすたいにめ早月ともなり人さへたれにさなへとる まれおか

船五月雨

よりすかへとさゝわけさみたれのくりにはふれ舟にそ ふかくみる

舊砌瞿麦

とこなつの花とはなきてうつもるゝさみしきあさ露のみよ うろふ

遶夜鵜河

みつかのてすとうしとゆせようふれ庭さしたる一夜のかゝりは

照射欲明

よるかりのかふ部やほかさりえてかへりぬ夜もすがらよ ともしさ

螢照水草

ホすくより螢の光さ葉かは水のくりてゆる世の ともしか

隣家蚊遣火

くるへよもかり有てぬきやりのけぶりたつ栖 あか庭よ

遠村夕立

錦のもとにひかるや夕立の音の夕さとよ みとり

樹陰納涼

まくしけなくふかやなきせん秋ともみえぬ松陰に まして

瀬荒和稲

さそひけんのへのしつくにうつる袖の水よりさきにあさきせん

秋二十首

初秋朝露

いつはりのなかをもしらて来る秋のけさよりまつ露にぬれゆく

霧織秋衣

秋きりやたつをみなへし草合よしのたつもしもたちなむを

荻風似雨

さよふけてきくまつ萩の葉にそよくなる秋風よふかけ

露花移水

花さくは色すみにうつれといはうなる露の水の花えりけ

薄紡絲夜

夕されは人まねく袖や秋風もすすきにみたる露の蘇

草花色々

ふかきよの花ちりつる露のしたの衣うつろふ花の色まさる

槿花一日栄

あさかほの花とみるまにしほれつつはかなきやいにしへ

霧隔山寺

鐘の音をさそふ霧にへたてられ山の寺の秋きりの色

田上稲妻

いなつまの田のものいねの露とまり見えぬ

籬底聞虫

日くるれはかきねの虫のなくをたのみあまた秋の

雲端初鴈

みわたせはくもゐのはてにかりかねのなきわたるよ

霧中遠鹿
霧ふかき野へのゆふ嵐にもおのへをこゆる鹿の声かな
月前述懐
めくりあふ千里の月は見し人の秋のいく夜の昔こひしけ
荒墟惜月
月にそてすまれしの影やあれはての淋の袖に深き
氷色添夕
暮むかふ山しくれにそ暮れて岩本に霜の夕をそみる
荒野分
荻のうへ川かせの音にたちそはやくも秋の野分しまそ吹
擣衣到暁
秋の夜もまたうちしらむかたのこころ哉ねさめてやしる也

對菊延齢
おく霜の山ちにみかしさく菊は老せぬ花の秋やちよへん
紅葉勝花
いろへ見し花にいつとまさるらん錦におりなすもみちかな
鐘聲送秋
切秋をおくれかりのこゝろにや鐘の音をしたふ秋へ夜鐘の音をそきく
冬十五首
枕上時雨
ゆくすゑは秋のなこりに立風に枕そぬれてかなしき時雨
落葉浮澤
寒樹交松
さえひさま木のみならぬもみつの色かはらぬ松のみとりさそ山の色

ねさめせしよはのあらしにつくづくと冬まてのこる　しゐの葉

冬草春残

たか野やあをはの草にいつまても霜をかれぬは　なにゝ

禁庭夕霜

もゝしきのみかきのうちのくれたけの庭よりしもおくなる霜の　夕つま

氷閉細流

こほりてもたえぬいさゝかきりもみつは波の音やかはらぬ　そらも

旅泊千鳥

てらす梅やおもひ[illegible]ねのねふりもさむしに床の波の枕　ゆえ

氷為池主

池水はいかにかもかのこゝろしらる池をこえてしゐ[illegible]　なり

霰音破夢

みかりするかりはのをのにかりくらしふりつむ雪に袖はらふ[illegible]

連日鷹狩

[illegible]

雪中暮燈

[illegible]

嶺後積雪

[illegible]

冬夜翫燭

[illegible]

爐邊閑談

[illegible]

老若送年

[illegible]

ちらくとはいふへくそ年波のよるとはなけく方　よやなけけん

戀十五首

寄天恐戀

うれしさはわすつもなけれ世よりわかれとおもふめ　ぐみも

寄風関戀

松かせのをとにてるやえましわれは苦き波の枕は　はん

寄雲見戀

心よし雨ともなれたのむの里にほの人の花にいつめは

寄山路戀

てふの葉見えてあさきかひもなし露をも秋

寄野占戀

木の下

出行の心ならぬはきそれにけふ命をありかた

寄海遠戀

うき舟の杭のなごとおもへとも波にひとを涙にて

寄里待戀

待ふまりの海に見えつゝ山川人の袖の月影

寄垣通戀

あはてくれ志の下にはなれやあまたを秋風のかきね　さすれ

寄草願戀

うらみを見すきも花のかたふくまゝに秋や　たのまん

寄木獣戀

いよふはれんけふしはみしふもよし山

寄鳥傷戀

山あかつきのよにも秋のなかれはいつもとおもふ

寄獣顕恋

よそにさへかへりてよわき心をもすまれし床のあたりとや きえん

寄虫切恋

あくさめくなくよりむしのさはのこゑ残るへきとしもあき とこを

寄鶏別恋

うきよのこゑへたにたかあかつきのよきあけかたは松風の こゑ

寄糸恨恋

たえすつゝけしひとすちのいとかたのよりまけて根よしみもや なくさん

雑十五首

洞戸雲鎖

ほとりかくおくのとのとさしいかにたえぬ雲のいつるをまつ里 あらん

村径細

そらにのみほそきさとりかへしつねなきにけるへきにそら あらの里

寺近聞鐘

ねりへおとかきてへりてねふるこれともわかれの夜さむにかねの こゑきくかな

夢林鳥宿

ふかきよはやまもからむ村もみえぬわけるもとりもすみのねくら

芦隣漁火

あしのはのおもへはよろしのかけはたちもまたしのいほのまかな よもすから

遠帆迷浪

おきつなみたちぬるへたをほのかにも清見風かけてみえぬ海ふねの ふね

夕陽映鴻

くもりなくそらにかへるやまのはのみのかすかにつらなれるかな なけり

長河似帯

行かくれとの山も夫の夢也むかれてまいて世屋山
猿人渡橋
たのむしほ心をよりも書くまて世てをかぬ求めたん
楼書逢昔
あるふそうえ世の雨ゆへ心とうふ水くさみ
紙争晩苑
おそし
遊しよすふ心乃詠めんとこしてこ思まれ尚
憂喜同夢
顕あ秋く今よ山のうれしさ袖とつむて蔵
みとく
逐日述懐
言のふ我ぬらんあそて身て秋の戌うつ人の色共
くれさ
陶淵是非
こふみそいふあたなすまといよ男なしあまやる
ひえ
社頭秋世
まへひをはきうゆるめや見え代々海になし此松
乃みせよ

侍従大納言家着到百首和哥　永正二年八月廿日

春二十首

早春湖

比良の嶺は雪にかはらぬ年こえて浦にきこゆる春のへ立

閑霞

春のすくれはそれとも見えぬ春とならはしは　舟

暮山霞(?)

暮れはせめてかすみの浪にかくれやる海松か枝の朝のかり　記

残氷

あけほのこほりの水上の山ほとりに春もなを

春情有鶯

春まつとうちもいはせしむすひかけぬに鶯の音　通

鶯稀

春すきて鶯もつけす春霞かたる時にこそあれ　なか

野梅

さそふよと立それとも春を見えかなとこそ梅をも　うすな

谷風知梅

香をかけてさむき嵐を梅かえに風をしる谷の梅　知らぬ

古柳

この世とてへんによし柳の糸をみたれていつ　まさ

磯若草

うちよせて若葉の波のあらい磯にわかれもの折の　縁すな

朧月

おほろなる春の夜の月かなたにふく雲と月にみえて　しなれみな

春山暮雨

ゆふあらしのたくらふ山ちる花に海つ春や夕の鐘

花 三

花のちりしかはなれてさそふ春の暮とおもて

うれしさやよそにもてなす花の紐いとけなしを

来る世も花はおもかけの春のかすみやしとそまつ

閑中春曙

のとかなるこりかたはなかめつまさそへ そよや 三のつれ

摘菫

春の野にとつみてしのはれてつきもおもふかな かきつの

款冬散

さくとそうき春のすゑとおもふちるやまふき山吹の花

紫藤

故郷のなかしみせを庭に松にかかるゝ藤とは なけれと

船中暮春

いつくにか行く春の行方ちそふ藤よひ やいかる

夏十五首

竹亭夏来

夏衣たちかふるかきねのまつ 春の たえん

墻卯花

卯花のかきねよりの春かちそ夏のかけなれ 夕かな

郭公 三

つれなさとかたる雲間の鳥の声きくより山郭公

まちえのかれたるすかはりはなくやまほとゝきすの聲

ほとゝきすみやこにかたらふやさ月のはれまなき空に
採早苗
昔よりも秋のたのみをかけてさなへとる手にいそくらん 梅心
菖蒲
露なからりえにひけるあやめのねなかしさは海さへきよに 池水
江橋晩螢
かすかなき花ちらぬ螢のたえたえかくれわたるらん すゞ
杣五月雨
さみたれはあさせてみえぬ山河やふかきの松木のまもなく ハゝすん
瀧夏月
瀧のおとよるにはぬるかとよむ夏の夜の月のかけ 水
簷夕秋近
このゆふへとにかくや軒の花にそ光をみる花とも月の色
夕顔
いかにしても月のかけの夕顔の花さかりける 梅
翫氷室
雪のこる山のかけにもきのふの氷にかへる梅はる
麓納涼
山のふもとにすゝしさは夏のこほりのすゝしさ すゞ
晩夏雲
夕暮のゆふへのすゝしさの秋風の色に 雲
秋二十首
都早秋
みやこにはきのふの秋の風をまつまつしらるゝ

二星待契

天河あかて待わたるなかなかに秋の契りをうらむ

露暁

村雨のあさるみやまの露の間に袖も涙におきてなき

独見萩

萩の花うつろふ色をひとり見て心をつくし（て）ぬれてこそ見れ

蘇鐵

さくらなる梅さきそめし花のおもかけはてにうつろひまよふ

薄似袖

ふくからに秋の袖の露をたちさへみゆる花すすき

槿未開

明くれはまつ花のかけをまちて残のつゆのあさかほ

虫恋

我かたにおもひくらすは虫の声にたてそなく

葦邊鷹

こころあるゆふへのそらの秋の雲みれは雲井をわたる

秋宮鹿

山里に宮こもりさく鹿の声をきくへしとや

遠近擣衣

ちかくまた遠くもきこゆる衣の音に我身かなしき秋風の

古寺秋夕

うき秋の夕くれすすむ山寺の鐘の音に

旅宿鶴

あはれなる旅やとりのたつのこゑ

月 三

まつ程も見えとすゑの山のはにかゝりしや秋の夜半の月

松ふく風も更ゆる夜の月影とあはれなる袖の露にやどる

十とせあまり猶見し月をながめてもさらにかはらぬ秋のころ哀しき

擣衣寒

風さゆる夜半の月のさよ更て衣うつなる山本の秋

秋霜

いつとなくうつろひ行秋の色をまた花野の露の霜ぞ見る

霧隔紅葉

おほゝしく立こめてけりもみぢ葉の色さへ見えぬ霧の籬やなかりける

惜秋

世中はうくもあはれも秋の行を惜むもなほあはれなり

冬十五首

山館冬到

立人の跡の路の松や行まよふ木の葉にかへて冬の山里 よし

河時雨

晴よりか河をとうくもなく海のはてに流れもくもる時雨哉

落葉声

ねさめよりやきこえの木の葉さそふ秋の嵐にまがふ 音せぬ

寒叢残

枯はてゝなほのこる海くれみてそ冬の夜のふるさとは 草

水路氷

梅くまのよき宿のまにかはる氷もよそにみる嵐をこそ見て

冬月

さ夜枕にと月は嵐てゝも方をうつさるれは袖の郭

津千鳥

あまの津の波よりちる浦千鳥[illegible]の縄やまつらん

池鴨

おきつかりとあさるともなく鴨のすむや池[illegible]のほとりかな

林間霞

あすみの林にかけて[illegible]立ちわたる[illegible]のむらの外に

雪 三

夏の海の[illegible]ふりつもる[illegible]
[illegible]をとはまし世の月と花のたつひまに
[illegible]をみなる雪の中まされ人のあまふらん

炭竈ノ烟

[illegible]すえまつの嵐も山嵐の

埋火待暁

おきよたのむてんの子孫さめてもかしらの火と[illegible]

除夜

さめぬまゝに年のくるゝをあくとも

恋十五首

被出新恋

くちもそらもやすらふ人にまつさまに

忍忌恋

思ふとも[illegible]

関久恋

年せたてやいとふはたのみの[illegible]

来不留恋
うつりはの袖にとまりてくらふよく梅かゝあかぬ春の夜
適逢恋
たまさかはよし夜の夢てさへゆめうつゝとめくりあふかな
別恋
まれなるは行ひそへなからもあさきめほとにうらみらん
疑去偽恋
あすやとてたのみしそれもなれや世をうみにあれや かくやと
隔恋
心あるにたとへおもふや雲きりて花香れてもよそにはなれて
春夜恋
まのあたり夢なりとても花の香のすゝはなきことかな こゝん

夏夜恋
みしかよはあけさめぬまの夢にたに見えこぬ人のつらき夏の夜
秋夜恋
さらぬたにひとりぬる夜の秋風のたれを恨の袖の露そも
冬夜恋
さむき夜のたえぬおもひをこひわひてまつ夜の霜に袖さえて
暮春恋
物おもふこゝろの暮も春のきくおもひのこらぬ雑ふらん
暮秋恋
木の葉ちるみきりのうらも紅葉の秋やてゝ身の秋もくる
歳暮恋
うれしきをよそにかはりし年月に老の年となるもおさき

雑十五首
雨塢翁曙

山のふもとにのこるはしの梅の花のにほひやたえぬむかしの
なりけん

山家巌
いつの世にたれかすみてし山さとのかきねのいはほこけむしにけり

田里
海ちかき里の桑の木のひきたひくかのつらよりゆく山のさと

磐懸草
年ふりしいはほのかけのうつほ木のこけのふかきにのこるひともや

洞槙
山かけの洞のまきの木の色ふかく秋風にもかはらぬみとり

鶴聲近枕
秋ふかくのさむき夜すからなき鶴の枕にちかき声のさひしさ

白鷺立江
入江の水の淀かくまよひつゝ立ていさよふ白鷺のかけ

山猿
なかめやる峰の梢も山風にかへる猿のこゑそかなしき

野猿
まつかせのこゑよりつく木の葉ちるさとの野猿の声そきこゆる

海猿
あまのすむ里にかけてはなく猿のこゑもなみの音にまかひて

胡桃色
うつりゆく色のうすさを思ふにもくるみの色のあはれなる哉

寄燈述懐
つくつくとむかふ燈ほのかにてむかしの事を思ひつゝ

雑十五首

えなきみをもわすれそめしうらみや物くるし　火

寄帯戀

あらなさいかくるゝ物をたれかわすれめし入けん　昔も

夕関情

いそよそのこゝろをやとふいさめしたきつまてりたは　此よろし

寄書戀

家の此為の道よりおこりの道をのみて我君のため

同府 于時内大臣 着到百首和歌 永正三年五月十八日

春二十首

立春

下せとやいつをかこれと春も又今日立初るいかならむ年

山霞

かきくもる雪み様のいさ風昔哀まよふのかすみこそみえ

浦霞

浪のおとにうち吹つけはかもめみなみをわけるの千尾霞

鶯

ほともなくたによろつ鶯のこゑをめすとやなく里よりいつ

若菜

春秋のいそきやめそんさとを知てくみつむしなか

梅風

うへさけの花の香さえや昔風に梅のかゝをかへりといひまゝとりわくか

夜梅

おくら梅に折りいる梅のにほひやさしの梅の枝

柳

めくる柳のみとりちりえむとてそむらのさかへの梅のかこの風にも

春雨

さほひめのそめしえにもの色の梅かおもひうのとかへる

春月

いつくまてやすらう梅かも月もみえん花の色のにほふ花をみる

帰雁

おもひきやみなれにけりを帰る雁の梅の花のみちそむ中をゆく

尋花

さく花やおくの山路のかよひ路の梅けん深山のさく哉　左府

見花

むかしたに深山の花のいろをみてとめてかはらぬ花の色かな　よし経

盛花

とよまれてくもかかる花のさかりをこえてまつかな　行末

惜花

世のうちはかくさめぬ花にまかせすゑ君なせ　うらく

落花

うらみぬとそてにさらに花ちるとそ見よたれ　ともなり

苗代

はるくさかりの水をせきくだすなはしろの

[illegible]

歎冬

山吹の花のもとめよ玉ぞこい浦の春のなかすに

藤

いつれかた浪よするくさ藤よ木にかかれる花　むらかみ

三月盡

なとてかく心をくるしく春のいくよの暮の春　物かれ

夏十五首

更衣

きのふたつ春のかたみにころもかへせん花の衣を　夜と

卯花

山風のふくやあらしに雪さそふ卯の花　さつけさ

待郭公

きてあへ思ふまゝや見ん時鳥くれたかの待と　めして

郭公遍

ほとゝぎすはやせやあつさ花鳥の山　ゆうき寺

早苗

まくちてまひくとかふ山水まてぬさすよりかう　いかゝれ

橘

むかしそ染ぬ世の花やちくちる花香よのて　光秀

菖蒲

池のよからまゝやいわやくさのねのかほよ花と　不知

五月雨雲

風のやまみかゝえをはるわすまあそまゝいさやさ　さてかの見

何文月毎

其月のあかよの兼紙中とみ(あまそ毎のかゝや)　ちふん

夏月

此鹿あつにてはえぬる風かや秋風らの行席の　月子

夏草

むさくさく梅そろあくさの花すれやぬ　如舟

蛍

河の世よさに見る事有か池のみさこみ　荒人

夕立

わすれそくよるる金えあめつてさ弁を深らの　毎つか

納涼

何と見くみそるてさゝえのさゝ見かさら松の下　かけ

六月被

よしさハ[illegible]みあら[illegible]すゝ風あ[illegible]みえ　さだすけ

秋二十首

早秋

露にさやうにおもひしハ秋[illegible]あの[illegible]　ちかの奥

七夕

一せを銘まやたなばたこの[illegible]きをむすぶ　ゆん

萩

[illegible]秋風[illegible]萩の[illegible]いつて[illegible]の　ちくさ

蘇

あな[illegible]にいつれとおも[illegible]花よ　み[illegible]

鷹

[illegible]やむなき[illegible]

鹿

聲あり[illegible]山の[illegible]よ[illegible]　うま

虫

[illegible]や[illegible]の秋[illegible]人を露[illegible]

秋夕

[illegible]ゆふ[illegible]　[illegible]

秋田

[illegible]ふ　いちの

嶺月

[illegible]の[illegible]来れ秋風よ月の[illegible]　くれ[illegible]

原月

露[illegible]く秋の[illegible]月[illegible]　[illegible]

閏月

月一かへりしてもとにかへるやうき昔にかへる世の中すら　なるらん

湖月

さゝなみやわかまつ庵の秋風にくもらぬ月はかはらすそ照す　とくなり

浦月

さつき見や月よくりかへし松原にてすゝしきに塩　ていり

擣衣

よるまつは夜をとをしてうちそへて月を見てうつさむ　さむ

霧

秋風にさそはれ来てたつ霧はふもとの山のかけもくもらす

菊

秋の花しらぬ人の手植をみてもたいそうに見るや菊の花さかり

散紅葉

あきのたつ日にその秋のちりてくれなゐ葉そちらしてある　さくきくらん

濃紅葉

りんちうの山の紅葉はちせよ落て山のこのきはへうし

暮秋

あきのよをのこすをしみ秋はいまもうすみて　ひさうさ

冬

時雨

ゆく秋の見の露をもしらて袖ぬらしてしくれけるかな

落葉

あくさの枯葉をさらむ木枯に木の葉のおちる　なすらん

霜

とをく木の葉ちりにし和哥をきよらみの胡蝶の色

冬月

あまりゆく月にはいとゞ積れるを庭にしてきくらさむきしをと

寒蘆

浦風に打みだれ行あしまちてあはきりふみよるまもなし

氷

ねきこほりやいはうちなかのたえまにもむすぼれけるよるの水のましよ

霰

玉あられしばしてもみえあへぬ風にさえあかりけるかな

千鳥

浜千鳥いる浪や浦風の磯のかよふ声すなり

水鳥

霜さえて初氷ゆく水鳥のあまの袖にもたちぞみだれて

野雪

朝ぼらけ野べの雪見ん春日野の若菜をかさなりし白妙にまた

庭雪

うちむかへきのふはちらでしめおきし庭の跡より春の草葉にもうづむ白雪

神楽

あさくらや声すみのぼる月よみの夜も大空にかよふ松風のこゑ

鷹狩

みかりするかた野の小野に日もくれぬ狩場のみのもとにこそあれ

炭竈

すみがまのけぶりしら雲やまのはにたちそひてちる山おろし

歳暮

しるやそもたえのまゝぬ我なから世にたえなからねさめの　袖か

恋二十首

初恋

うとくなふ心をまよ守の子ゝ中の花の内よ露子　うき身

忍恋

人にいはゝたゝかれなりてかくれは我やわすれ　風こそ見

祈恋

せきもあへぬ袖よ有ける川社みそきみもいはぬな　らん

不逢恋

あふことはせとなふ海の中にまよりそてかたらひとゝのち　なりとも

関恋

なにはの世の人いてとゝなくてとうよしとたゝも子のゆ

見恋

いかにせん人をみぬめの中にいとなかれる袖のまへ　しかも

聞恋

思ふけいはかなりありあらの名をたのむしらし　人の音のせ

待恋

日よりいつまちかなさくめそへりやまいはさこし　心をそや方

逢恋

うとくいふそ逢そめてゝりそて風のむもそしまの　夢の枕

別恋

逢やかにさきうきてくよりそしとつきあとみた　とても

後朝恋

わかれしよりかくの庭のみなさいにむすくゐつすくせかとも

顕恋

あさくとりしよりおもひそめにし恋そてにあらはれけり
いまは来

逢不会恋

あふちかつきさをたえてすちよ年よりへのむかしの
絶かへく

懐恋

ちかふまてのこそわか年月のかはりひよみそんせ
ゆくらし

変恋

たのめくはしこえこしよの葛の葉よさかの梅へとりこえかり
いのち

稀恋

思ひしめんこけりしかはたえたとなのむ中さへ
さくらのみ經よ

久恋

我のみと思ひかかはつれなくてたりもせす
あさなみ

忘恋

このはなの言はしきやみてかりし夏はからなかをたまも
あらに

絶恋

篝火にはそのれてかとかけてそはかやのにてわかのみの方
よはかりに

恨恋

ちかをもてえらにしとそわたしいはやうしと
みなかん

雑十首

暁

世中はつねもろくいさ来れ名の袖りそれそいそめの
嘉録

松

とはれ来ぬ中にはねやとのふれ毎々なかめよき道
さおかん

竹

幾代へてやくよせうにかへをさらへ人毎の千鶴 まち人

山家

おもくれやすみうきあつまし山のひあかる世をとく まとも

田家

津田かりかりほなきけん秋の庵へてぬ夜深き なり

雑

神乃露と光よやちん千歳のまつりかへくく代よろつの 程さめ八

海路

すめん世のためよきにむかしにほかい海の波の 風にまかす

述懐

くもる世よむかれあかす昔ってありけんほよはい かすみ

神祇

かすか山そこにかみよ代の宮柱立つのまへき そら毎も

祝

幾代の光をたてくくみつこにしよきく照すかにむかり なかれん

同所着到百首和哥　永正四年三月廿日
禅林寺殿七百首題之内

春十三首

都初春

朝みとりいつくはあれと九重の宮ゐよりこそ春は立けれ

瀧霞

音羽山音のみきえて見えわたる瀧はよそめにかすむなかれの瀧のしらいと

里梅

いせんにも梅さく宿のかをりにや宿をむすふよたちさとのかに

柳露

なにとよみえむ柳のいとにぬきとめし露のしらたまはるの風かな

春暁月

立やすらふ
有明の月は霞の光をそへてかすめる花のかけやと

霞花

雲かゝる花のかゝりの山よりもなかなか海をへたてゝみえ

暁花

花はまたほのかにくらき山のはにかつ散る花の鐘の音

依花待人

さくらはなあかぬたよりときく花とまつ人はまたこの春やみむ

忘花園

春は世のうきをもわする花園の花にむかへは春そのとまり

閑花

しつめたる花の色そふ山里の花にうかるゝ心なりけり

落花如雪

花とみるうへにかれ風の人の香氣かきよ流り　末淺

河邊苗代

春にまかれ水口ちらき濱えんかうるのにとこゆ　利方き

三月盡夜

今ら移ひかすかんにおしきよくこしひ北すん意　とやらん

夏七首

聞郭公

おぬけよ志のひきやおよをいもあにいける　為

雨中郭公

されぬま浅露のすゝとよもきよ山本葉つきす無や　うせよ

魚橋納涼

夏のよまれいをたよ橋の花や影のと翔れ納涼

気早苗

菅わろ水の急ろきせ山田とあそいますよら　さすへる

連日五月雨

宮はつて風にれ流の五月雨よ北清とにも月をうぬ

隣瞿麦

なまえよ庭よ中の花おわりて我とこすつれ枝っ　あるゆゝ

聞遠蝉

あさしなへおつきもなお末淺の流れのえ見え　さきれ立

秋十三首

立秋暁

流人の稲さの歌のれ猶り秋とて流つろのかの納　伴

荻夢

見えぬかけや夕露の根わたしおこせよ萩のかきね　〇〇
朽森
朽なやよそてしめとるんは森のおちこちに見えて
苔径露
分ゆく道にぬれてもすゝみ苔の下露
秋夕雲
あはれ秋の夕にぞまさる雲のはたて
籬間鹿
つれなくもむらさき山のしかのなくこゑ
薄蓋鷹
袖の露なみだに似たる花すゝきの秋風
月照秋
おもひそたのまめかたにはてなき月の影
閑庭月
植えさしゝ庭のしげりの月も物さびしき
湖月
浪の上よるさやかなる月影のみるめの泊
古寺霧
一むらのきりの晴間のちかくにすすむ上の鐘
紅葉散々
山のはを立よりてふりちらせる紅葉かな
庭枯園
冬がれの秋の名残のはなしのこる人のまがき
冬七十首

湖時雨

みほのうらいりえもわかつ比叡おろしさそひきたれる時雨の松
おきの江

落葉殘秋

ちりのこる梢はかりにのこれともいそく秋さへとまらさりけり
よみ人しらす

垣根寒草

紫はかつふりまさるしもかれの垣ねのくさも風そさむけき
よみ人しらす

澗氷

わきかへる山のいはせもおとたえてひとりさむき澗やこほるらん
よみ人しらす

雪中鷹

あはれなるゆきにもこゝろをかけてけりはるかなる鷹のかり[illegible]
よみ人しらす

濱邊雪

うら波のたちくる浜もゆきふれは[illegible]やま[illegible]

向爐火

埋火のあたりのさむさはなれぬはたのしきものはよるの爐のまへ

戀十五首

寄星戀

ほしのかけたえてさらにみえぬ夜はわかこひしさもいはむかたなし
よみ人しらす

寄霞戀

あはれかくひとめをかくすかすみさへわかおもふ人のなかをへたつる
よみ人しらす

寄野戀

かすかのゝ[illegible]秋風にいとゝ思ひのますゝきかな
よみ人しらす

寄沼戀

こもりえのそこにかくれぬおもひかなあさきこゝろにくらへてもみよ
よみ人しらす

寄樹戀

しるやいかに月のうつれる袖ゆへに我そこほるゝ
寄菖蒲恋　　　　ひきやらん
思ひこそ身をかくれぬのあやめくさ心にたえぬねや
寄蓬恋　　　　　　あらはれて
袖のうへにかはるすやわかれをしのふの露とこそ
寄郭公恋　　　　　いはしとや
わかことゝにいとはさはすきなきて郭公なくこゑはかり
寄蛛恋　　　　　　かくる人
よるのころもの糸すちのねたくもおもはさらめや
寄床恋　　　　　　ねられぬ
人のおもひのたえそのおもかけまつとかくのみ
寄衣恋　　　　　　かたもなし
しらぬまにつもりにけりの恋をしらてそなかむる
寄樋恋
かけひとてこゝろにかよふ思ひのたえす
寄弓恋　　　　　　根なき
ひくたひにかはるとも見えぬまゆみの
寄泥恋
あはれてふ人もなしにいたつらにくちやはてなん
寄貝恋　　　　　　ためしなき
かひなくてしらすやいかに見えぬ浦のわかめ
石清水臨時祭
雑十五首
いはし水神のちかひのたえすしてなかれひさしき世をまもるらん

御新會

動きなき代の庭はくもりなきのやまとにしき萬代の　まつかな

舩中遊女

あさゆふのさゝゆる色かはしめちらへなかむ一

又忍思

むりしや袖ぬるゝとも我涙は露けかりきへあさかなかのやと

霧中秋

さむしろにひとり秋かぜのふくや秋風とへ

霧中鐘

ぐちよその鐘をさへもいろかねあとのさ葉の

名所山

思ひやる富士の山高ふしていかなるのたにもしるらむ

名所湖

さゝなみのよろづ世をわたるともなみにみちもなくはたえぬ志賀のうらの人

右亭加例皇山御會　三月御遊

山家雲

松かけのしばしより上雲

山家鳥

山水のあさしもはらひかくやまてこそ

澗草

たにかくれそのためのなくさむ草にむかしの身

山椿

色かはる玉椿

寄玉述懐

くもりなき

寄雁述懐

としなりや世代秋風の雁かねにおもひそへぬる老のおもさ

寄道祝

家々はいさめし流よの文と道たかふや我あまたまし

同三百三十三首始く内 六月下旬

春六首

立春朝

朝ぼらけあけそむる春たちしもとけやいかに雪の氷も

幽栖春月

よそにいかすまぬ宿はいかならん我すむ庵の春の夜の月

牧春駒

春駒をおもひこまのつまえたらすにあそふ見え

終日對花

あかずみてぬるゝこころの花の色に入日も花によふ夢

忘帰山花

風そむしきの山こえ出て迷ふ波とゆくかへさそふ

池下藤
いさゝ藤や藤のむらさきにしくものそなき池川　以之清
夏五首
卯花夾路
うの花のさけるかきねやとめる花の中たえはす　よみ人
雲間郭公
さそふらんやふかく時鳥なくたえまに雲もふき　雲
菖蒲
あやめ草かけてかへをなめし世にひく契　貞之
山陰鵜川
のきくらし山の端山にさやかなる夕へ舟　さんすん
籬瞿麦
草の花なをなすゝきの中にまくらむとなりの花
秋六首
二星逢
秋風やいなすゝきにまねく女郎花はせ
山女郎花
おもひは山下露に見えて（とゝめ）なゝ心をそたゝり
遠霧
虫
秋君のなはともに虫の音よ秋風とさしもうつりく
山月初昇
中の空てさや山の端に月を見て人まつ
古渡霧深
きゝかんへしみゆすかはまうつゝ宿のうきも秋や

嵐前紅葉
つれなしと〇〇のりみちれなるとみ川さしもえぬきさ　うつせ
松の嵐丹

冬五首

時雨晴陰
志ぐれ行く空あらくさりぬ行くくいゆやまりもはせ　くりら世と

若紀霜
記さくぬとけりみ中の小にも若くて世の妻ぬへ　めん

尋細代
とりやまりけんのミやさて波れまのあしろいうてし　もむ

磯色雪
雪えこふ風い吹して波あら海松の松ら能流りらて　みなと

春已ト隣
冬のさとかきて取あらしのまも寒くうさぶれ　そしかハ

恋五首

祈恋
こひ死ぬるもしらでこひしさに行えずちよ　なへらん

急恋
いそもにくりてをつるる月とかさ追ぬうら　こひみせけせ

逢恋
おもくいのりもあへぬてまのえよ年かすと恋て　つみらん

寄海恋
こひわびぬとおもいわりう海の松ぬきといつつこひ　流倉

寄契恋
なせよおもふらん中れあのてつけきしとおもふ

雑七首

寺近聞鐘

きゝなれておろかなる心なりけり暁の鐘のおとするよ　さそて

鷺立洲

あはれにもすゝしさやなきの波よせてたつさきのかも　とまつらん

氷葦

こほりにしあしのしたはもあらはれて　こほりのあしの

旅人渡橋

行かふも世わたる道の橋なれや　いそくたひ人は

遠帆迷浪

浦風に浪のうきしまもはるかなる　しほのはしけ

暁浦鳥班

よしあしのまたうきふしもかよふ世の中にたれかあはれと　しら

寄雲懐旧

うきくものなにはかなしきあはれをかさねて　とはむかし

内裏着到百首和歌　永正六年九月九日

春二十首

歳中立春

世ハとしこえぬさきよりかれて立くる春の空哉

野外朝霞

野へハまた人もえぬ朝みとりの末の袖やなそ　うそ

海上晩霞

いろ見ゆる浪やいもせん浦はたなひく浦のたちへはかすみて

山居子日

君よわかる小松をそ葉のかけをとてひくね　のひこそ

氷御若菜

池水のしもかれのへやこう梅たちそのこまかめの若菜

春鶯呼客

うくひすの声をしるへのはなのまにまにつけまほしやを　うちもきかし

氷消田地

春きてハこほりもとけぬ山田よりむすふへきなれやとも

南北梅花

こそ春たちし花のふるえにさきそめて南の枝のにほへる

霞暖梅雨

いのちをも春の霞へてこすゑの霧にさける梅　うく

春鷹雛

ゆくさきにかくれなきものとてかりにやとれる雲　さそ

眺見春月

見るよ世にすむ月の影にありし根もなし月をもや猶人

雨中春曙

明ぬるか空はかすみにしたくもりむらさめよ春のあけほの

柳無気力

吹風にまかせてみたれやすきの糸ひくいかなるもの／うらと

藤浪春雨

かゝしとも春さめそゝく藤浪は春にのこる色

行路春草

和かくさはいまり／して遊行人の行路のまゝに千とせ

山寒花遅

さくら色の木陰よ山の花をそへ／て花のなし

花下送日

花ゆゑにいのちをかけ折ゆかんとこゝろひとつくらすへき

落花入簾

吹風の毎日ちりしてそひく玉たれのまゝにふかくやうつるあら／色

桃花曝錦

みすくらしのよの花やさきて海やまかよふ木陰を

留春不駐

あはれなりいつまておしむ春くれて思ひたつ／あはれ

夏十五首

羇旅更衣

旅衣きさいの人やまさくら摺衣形山のまゝにみえてん／よ

殘花何在

いまさらに花のうつりかたみにちりそめぬ

人傳郭公 云

やつれしてある人の借ままですぎてしに時雨の風

寝覚郭公

初音きくすだれのなまよおきてこそ寝さめかちなる 　ちかなか

廬橘子規

かの花もむかしのにほひよたちばなの枕に残る　木のさき

民戸早苗

さなへとる田子のたもとくもりがちにかへりや蛙鳴　覚ん

杜五月雨

さみだれは杜のしたかげあふ橋本のさなや　きよ道

湖五月毎

むつしまの鏡の山すそはりての海に五月雨　ちか

鵜舟廻渦

鵜かゞりふかすやうら舟のそらか火も廻るもしほは　ちか

連峯照射

さつきやみ峯のともしは峯つゞき月やかさねてわたる　さ

里蚊遣火

かくたくさとに山のやりたてや里つ絶えまなき　ちか

閑庭瞿麦

おもふぞのわくなきはたへにうつりとこなつの花　ちか

河月忘夏

此やまにうつりやすき忘れん夏のまこそ影さへ　よ月

野宮竈火

もれいてやたちし鄙の杜の風はらしの花のかゞり　能

晩夏蟬聲

すく洋てなる身のをこりのあきんぬ山よりおくるみな
月のあ

秋二十首

幽栖秋来

ならはしく花よりはかくし草むらの露をそ雨さぬ秋え
さりよちり

二星適逢

下せのつまえよりにかりぬるをいはぬや君か星合に

織女惜別

うのまりふりうちにわかれとも人よりえとわれる星のかはら
ゑさうへ

水澤閑萩

どりやなく萩の露にも人にふれて袖ぬらしと

萩花蔵水

ちりうらはいてしまいみせて萩のむもちの水や被おはれ

女郎花露

にほひかはるをみなへしの露になみたをあめとて
えるらん

風動野花

あきしひく花野をみせて秋風のはけしさを種よう
かなく

唐律何方

たちの暮はいつれかえよさきひこしをのかねも鼓
さやさと

秋夕傷心

みてあらん秋をこそ暮の残月よりはむかしのかけの
なかめや

遠天旅鷹

こうてふるあまりむかしや君かうへむかしの雲かひゆる

横峯待月

鶴のなきくらきたるの峯をかけし影をまつ月とえんはな
一浮り

明月如晝

なにはえし影へうつるも月のよはゝへかつらめ　なるらん

十五夜月

月もそそかゝくの秋も眺めて波のり中に影さを　おして

雲間稲妻

とめゆくき影とへいるまを明つまのをしのよりゐつあまり　くらたに

名所擣衣

よはもしきこまや吉野の山ひかくこてかかりゆ衣うつ　らん

霧中求泊

きりうきみつ泊え見えて包まてあかり海より千鳥　舟人

伴菊延齢

まの秋れ花よしれつ苦へえくともまれ川の神と　う

霜草虫吟

露ところたのむ陰さえ虫の音れ枯やゝしま霧の　ちくさ　みたら

紅葉出墻

山さとの庭の薄紅葉の枝をはこすまれ音に紅葉　て

山路秋過

ゆくみちやこえる山ち切る秋やとりの冬名　れる

冬十五首

初冬落葉

冬来ぬと組く風や秋よちり木の葉に庭も見え　む

遠御時雨

切弱の雲もきて山にてこそゆくの時雨なる　きう

寒草霜ゝ

あらすなる草葉につらかれしもまたいそきかへるい帰るよ
狩りて

渓畔寒葦

あはれなり海松の冬とみるやなさ[illegible]浦の
かのあし

月照網代

しら浪やあらしのかたちはつかれてとまる月て
[illegible]

連日鷹狩

あすもまたかりくらしなんやかたをのいとゝあはれ
[illegible]

薄暮千鳥

くれのりしかたの[illegible]も[illegible]か[illegible]
[illegible]

氷留水洋

[illegible]山水のこほり
[illegible]

寒閨聞霰

みな草もあはれとてよるなかの国の
ふちかな

水鳥孤舟

あらしふくこのへやなみまつ[illegible]おのれ鳥
うきね

雪中残鷹

[illegible]のいま[illegible]まつ[illegible]
[illegible]

眺望山雪

つもれる[illegible]の[illegible]雪山風
ふく

雪埋苔径

あしくの苔[illegible]雪[illegible]きえ人
とふ

婦人似苔

老人惜歳

花まくら[illegible]の光をまつとみるをし
をし

世中はなきをすくなり男のよし年くれぬとも　たかしさ

恋十五首

思不言恋

あはれとはしのびにひとり思ふにもなかなかいはぬぞいとど恋しき　しのぶ

祈難会恋

みちのくのしのぶもぢずり神にのみ世をいのりても逢ふよしもなし　あり

顕無名恋

つれなさの中にかはらぬあはれをもたれかはしらでうきなたつらむ　ふすを

扣互思恋

いつしかのいのちもかれよ我もいつまでとおもふかなしさ　あまりえ

不堪待恋

こよひさへまたれぬものをとやかくの松の雪にも世の

隔路変恋

風のみや行きかふ道のへだてにも神のしらずやかはる心を　こゝに

時々驚恋

いまさらにおどろかすなりわがためのうきよの中はしらぬかひかな

違誓言恋

たのむとも神もちかひのそら言にわがもとめしはうらみなりけり

深更帰恋

ふけゆけばまたれし人のかへるさもあはれかなしき　とよえ

後朝切恋

一夜ねしこのよのけさはいかならむとしつきのわかれ　ありや

逐日増恋

はかなくもあはでふる日のかずそへてこひしさまさるなげきなりけり

班女離恋　　　　　　　　　　　　　　久よ

なつしくもやとてみえすてくこかはしまきて　別れ

見形厭恋

ちかひつゝさす雨しよ班女かみて我とそふ　物うき

披書恨恋

ちゝやいかにあしくちのはそてかりふよぬるゝ涙　こゝろなれ

絶経年恋

猶さるへくもりしやいつまてくるしさかる　秋風仍元

雑十五首

残月越関

わすれもいつのちかひつゝ年ふる末はつゆの月に

風破猿夢　　　　　　　　　　　　　　　　　　　かの

こゝろのたゝりかむとかりすゝ猿のよふこゑもかなしき　あか

嶺林猿叫

みねたかきあらしにふく木すゑにましらのなく声ぞ　ら鳴也

翠松遶家

ゆきかたや庭にかきわけてなかの松のかけのさひしき　りうて

山家人稀

猶つれゆえにあさき風のおとふかきもあかのさみしき　山よ

野寺僧帰

ゆきのかへるさの寺の野の暮のゆふくれにさらぬ人の　露そそき

田家見鷺

さとのかたのなみやかたのすむ里のあきの秋

樵路日暮　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　さむひつ

山のはを出てしいさよふ月よらす我方ハ我かたらしき

晴後春水

梅よ見んもえいてし見えしあたら春しもむすふ　水のみ

滄海雲低

つもりの色もえさへ霞の海たれか松のみとりかくらし　石見

漁舟逐浪

なかれ行やとひてわたしを舟波よ千草乳のすかひ　梅く

江雨鷺飛

波のまもりふみまよふかはの是入江の海に雪乳おち　うけ

秋渡[illegible]袖

すゑ代ミのひあかいときめもそよの渡りの露の袖に　たゝし照

夏衣傳人

うしあたのむすひを三乳な世中にいつもあつまへ　[illegible]

竹鶯遊争

あけ衣をたちはしさて母の花見人の代にたちかへ　[illegible]

永正八年三月三日　内裏着到和歌

春二十首

山早春

今朝よりは霞やはるや立あへぬみやこまてむかふ山風そふく

子日松

むさしのも袖ふる海の色みえてたかねの松をけふ引のへ　元つか

海上晩霞

なかめやるまよりむかひの海の山かすみはれゆくそらのはるの色　すゑより

竹巣鶯

うくひすのなくねよいつみむ庭にわか世をとふやす　あつしよ

尋若菜

たれか家のかきねにとふらひ雪消ぬ海よりもあすそかし野への

松残雪

立かへりみるの松をよそにや青葉の雪に又と　まさかへ

梅香留袖

梅花そのかをすりのふちの袖にもまつ袖に残くしきかん

橋辺柳

なかめ風よくるに袖すみなれる水のかけ橋めくるやさの糸

幽栖春月

とはれぬにはにもやかすむしのんかりへは君のあるかたも　うえ

野外春雨

若草に見えわたりやしかむかしのかやはみのかせ　春のえ

春曙鶴

ふりみるやもふかへしなきのかせむかし鶴よはらむ　のき

花始開

うつせとつゆやいとみまちかくとみしは咲初にけり

静見花

ゆくへかな花をしも世をは山もとにのこりて人まち花もまたなかりけり

依花待人

さくら花の色をも知人なとかけもせと待ちさすらひにこそ

花慰老

花やなにかあるよといひしらん老らくの世をうつろひとみもとも

落花随風

散さうふ桜の風に花あらそふすゑをとはむすふ木陰にぞ

雲雀落

かすみをも揚ひつゝてもなきかくるあはれやまた花ぞ

水邊款冬

きよみつの水にうつらふ井手川や行せもすむ山吹の花の色

款冬露

山吹の花の匂ひの露をわけりとかくしつゝ人の色をかし

暮春藤

ゆきてもとより見よ散浪よりて海辺こゆる花の名を

夏十五首

新樹風

花を見の後の木すゑのみとりもすゝしき風のかほる

垣卯花

散浪し夕されば山さとの垣ねそとみえし雪やさけるかの

杜鵑 二

秋たにもあらしそよひは侍るをうへくもこし杉のした

郭公行方

雲海よりふ山ちかく中空に記さはいつくをさしてなけるかな　けるらか

池菖蒲

池水のみきはのあやめひくと折人やおのかおもかけをみる　めるらん

對橘問昔

さくら花ちりにしあとのたちはなにそのかみの世をとへは我とこそ思へ

五月雨晴

さみたれのはれまにいかてしもやそのこすらん

峯照射

さ山のみねのすそにみえつゝ照月をともしにまかふ夏の夜

庭夏草

庭のおもにしけるはいとゝ夏草の分る人なき跡もなきかな　おもかけ

夏月易明

月よいつまちてみつるをあらたまのあけぬとつくる人をこそうらめ　つまれ

隣蚊遣火

蚊のこゑをたにあたりにきゝなれて軒のけふりもくらく　一むら

螢似玉

むすひをくはらひのもとの草のはにもゆるほたるのつゆとまかふと

遠夕立

雲かゝる山のはしはしおもてより駒にてやまたゆふたち　みゆらんかたの

樹陰蝉

木たかき陰にはきこえてうつせみの山のこすゑのなけかなしみ　らん

納涼忘夏

見えさえくれしとをゝこえて海辺にも氷とむすふ

秋二十首

浦初秋

難をおくるゝ秋の浦風ふきそめてかはらぬまつのやかよふらん

七夕別

天川しはしのわかれおしむやたまつ程も猶あかぬよに

萩露驚夢

萩ふく風のうちおとろかす夢ならてさめぬ

蘋映水

さゝなみよするとうつるはかりぬめる水のおもにうつる影

薄似袖

ゆくさきもまねくや野風にたなひく袖とおもひけん

雲間初雁

こし路より雲のうへにつらねてみる雁もたなひく

田家鹿

うきこゝろや田の守秋の露淋しさを鹿にきかする

霧庭虫

霧たちこゝろ虫のね我もなくねのあはれ

寄衣秋夕

すみなれぬ秋の夕暮晴かたに

對山待月

くれぬまにさしのみ山のはの月の影

江月冷

汲さむき江の月かけ

月催涙

なかむれはやさしき秋の月ゆゑにわか袖ぬらすなみたなりけり　親子

秋月添光

名にたかき光をそへて秋ことに梅もえたにかゝる月

独惜月

ひとり見るこゝろにまかせて山のはにかたふく月をおしむ　為家

遠擣衣

ひゝきこそ風にしたかひ遠くなれ夜さむの麻の衣うつらん　きこん

霧隔舟

ゆく舟もきりにへたてゝ見えぬ浪まに秋のくれ　せんかく

沢畔鴫

夕暮はさひしさまさる沢のへにたつ鴫の羽かきのかけ

菊久盛

いくかへり色をかさねて霜の菊ちとせもあかぬ花の色かも　光孝

思紅葉

むさしのやむらさきのゆかりの色のもみちはをかさしてそ見る　わかこ

暮秋紅葉

照まさる紅葉のいろの秋の暮しくれもよしやもみちの　りうちく

冬十五首

初時雨

初時雨さそふあらしにふりそめてまつ木のはにも　とうこん

落葉有声

竹間霰

みやまへの竹のはかせにさやかなる音のかすみぬ　竜にいん

霜やこれとく拂ふ嵐のよはころもさえくもれむかさゝき

寒草霰

あられふる野への草むらひとつ/\をとしてやすくすゝむ草は かみなつき

湊寒芦

みなとえに風吹はれて冬の夜は[illegible]浪のむらあし

懸樋氷

まきのとのかけひのみつもたえ/\にかけてまつこほりけるかな ぬ

冬月江

秋ふかくみしも霜夜の月影に江の上かゝりしろたへの色 ぬ

暁岡千鳥

あかつきの[illegible]より[illegible]はなれぬいさやまちとり[illegible]

河水鳥

みなれにしかはせの浪にうきねして[illegible]のうはけにしもやおきけむ しき

閑路雪

ほとひさしふるゆきはあとたえて[illegible]にしかくれぬる

雪中眺望

うちなひく冬のこすゑのたえまより[illegible]の雪のあけほの

冬鷹狩

ふしはのつゆをはらふもおそしやみちのかりのはし さき

炭竈煙

ゆふたなひくけふりのすゑはうみのかたよこたふ雲の いりかな

爐邊閑談

わすれしをたえぬおもひにたのしくもかたらふ夜半のともしひ

年欲暮

かうばかりおもふこゝろを我ながらしらずやすらん袖の涙に　こゆん

恋十五首

忍恋

くれなゐにつゝまんとするなみだこそ袖のうへにもつゝまれざりけり　たゝう

伝聞恋

おもふとはよそにきゝてぞなげきつゝ人のこゝろのおくもしられず　ちかし

初見恋

あやなくもけふながめつる人ゆゑにしられぬおもひをかけやしてまし　やすかた

祈難逢恋

神ならばいのるこゝろもしるべきにあふよもなくてくれぬべきかな　かね

契絶年恋

なにとてかいのちもあらばあひみんとたのめしことのすゑもたえなん

待宵恋

ゆふされば人まつよひのそらをしもながめつゝこそ夜もふけにけれ　ひとすみ

来不留恋

あさましやたえぬおもひにくらされてたちかへりぬる人もこそあれ

返書恋

みずもあらずみもせぬ人のことのはをかへすがへすもながめつるかな

逢不遇恋

ひとしれずいかにしてかはあはんとおもひしをたのめしことのすゑもかひなし

寄三所恋

うきながらこのよはかくてすぎぬとも人をうらみんのちのよのため　すゑとも

歎顕恋

あひみてもなげくこゝろはかはらねどもらさじとおもふ袖ぞぬれける

恥身述　人よみやさき

若うきよすらつゝ夢とも見えさりけん　らうしさ

難忘恋

そむきてもあはれもおもひとおもひてやれ

留形見恋

御世となりて

浦のなにことゆへかやりの鳴をかゝる捨ん

恨絶恋

須ちりしし

けふあらやるとえへゆめりりかあをすり　と成から

雑十五首

寝覚鶏

なくこゑはうき枕にあまやよるねさめたあかつきの　枕よ

古寺鐘

鐘のをとあはれとうちと枕まつの露よ

雨中紅

わさけりとさてやめあらたり火の光とかて紅　あつめ世よ

薄暮松風

夕も世の中のたゝぬ物くれに松や風のかゝるさむ　らみ

巌頭苔

よすんかゝめをよみとも苔　かやいろん

峯洞鶴

多海ふきうつしつ海のたぬかめへよ何きう　ちう鶴

洞戸雲鎖

つれなくてをうきけり谷風にさしさそふ深山家　うし

樵路雨

恥身恋
著てしまうらつく海士ともなんさへすまてん　人よあやき

難忘恋
そ為をあはさすれともいへきてとりともちてや汎　御世をしのはん

留形見恋
浦におもひてさくうへやいりも鳴てけかつ絶ん　涙のしほし

恨絶恋
けふりやもえてとふへい海より恨んあらす　と成かり

雑十五首

寝覚鶏
夜くるはうち狩てかまやまくおのやさかたの寝覚の枕よ

古寺鐘
窓のいよあくれともてと聞ふれ来の露よ枕かな

閑中灯
かえりいそきてやかあんかり火の光とほく鐘　あかつき世よ

薄暮松風
あや世のかた松か新く松や風のかりきし　[illegible]

巌頭苔
ひすくかてあるとしふりの苔は[illegible]よ　[illegible]

峯洞鶴
多海ふるえてよこ海のあめへよ河さら　[illegible]鶴

洞戸雲鎖
つれなくて雲うちけの谷の[illegible]さ[illegible]深山　[illegible]

樵路雨

嵐にさそふ秋はよる柴風さそふともさらぬ紅葉をとれ　まし

氷河筏

氷上にかゝるゝ山川はたゝえやすらす筏士のあつかふ　ことぞ

山家送年

柴の戸をよりあつめとて年月を経てこそ　世の色

夢中境絶

よしさても絶ぬ夢さめてみれはさらに夢ゆめかへらぬ　の道と

旅泊浪

うき風よう浪のとふ人こそひとたひこゝろのまよひの　なみを

往事如夢

こゝろのまよひの浪のみつのうきの波を以て　あしお

述懐多

よしひとつ中にうけえぬに殺を身にうけてあさましき

寿神祇祝

すゑはたのむ君がいのちを八百万神にかけてあふ

三太夫

永正十年三月二日 内裏着到和歌

春二十首

初春

としのうちにくるすかたの春霞やまのはになかくたつらん

霞 二

はるはみなやこよりこそ霞もあとも春の霞たちて
かくれなくはらふかすみの中のさひしのかりの衣せく

鶯

そのこゑのうたねはうつしうくひすのさえかへりてたえたりし
春雪

きえのこるあとのこりてかせをいさむ雪にいかに

若菜

こほりし水のかせりつむ人そありやまてのさはにふる

梅 二

まれにさくはなとはみえてかほるらん梅の花ゆき
待ちくるなかにさかりのはなにこそあれ

柳

浅みとりかすみの衣の梅さへかせにみたれて

春雨

ふるとしもなくかすみもなきはるの夜の雨のいろそ

帰雁

こゑはしるこゝろもつけてかへるかりかねをゆきとふる

花 五

まちえてみかとの春花さくらさくやとの何根らん

桂むつきも神の花みえて深山の苔の色たのもたち
あくる桜くもやましあらいとはうそつきもみえ木陰と
まつむをくとらえしや花の人の霧からの庭より
花ならちてそく此時の折り歌よすくさみやとしむかしかあ
くせと

春月

むかしの山のはてて行月くまさに有りなる歌さくて
わし

藤

袖うすに岩にかし松の花咲えさけてさくらぬ枝て嶋
歌人之
露かゝるかはてゝみやま山吹くかれめかりかれむかしくれ

三月盡

いかに行かへるしてひくはしあすしいえぬ春の別

夏十首

卯花

稀にさくみ花山の流のたえなん光の雪かなあや
しき

郭公 之

色そよなきをむらさきすむしめ野とのかれめとそまたぬ
こよひやらぬはとらんねすまん海かとまくむ山時ける
むつまゝやまかの木すゑ人時ならば山のをちとかそうらむ

夏月

ほとゝきすに夜みつ歌の数にそめていわんあみ月そのかは

五月雨 二

山高き雲のいともむらつらつく人の五月雨むかし
風の音さき子の五月雨の雲ゆくよみ松の下庵

蛍

ふかくさの光と花の咲くさかりなる露のよそのみ夜をなく思

夕立

あつしさの柳の緑も夕立はすぐる山もと夏ぞかはれる

納涼

立よるそすゞしき岸の一葉かげにたちし秋もしられてけり

秋二十首

早秋

吹風くかはりしそめてけふよりはふかき秋をや告げん

七夕

星合の空はさやかにたなばたの世をへてかはるあきの風かな

七夕後朝

七夕のあはれわかれやあまのがはひと夜の契りのこのはかなさ

露

草も木も秋にはかゝる露けさのなをたのむべきすゞむしの声ふる

萩

すむかたはやどの秋萩露をしくちぐさにぬるゝ袖をならべき

薄

うちきてもなをこそ思へ秋萩の花にまがふる風やしるらん

緑こくむすぶ薄の穂に出でてかりなるやなからし

虫

かよをも宿のよもぎに秋風のいかにも虫の音んうし

鹿

さをしかのつまどふ夜やあはれとも秋のゆふべの露ぞこぼるゝ

なかなかに山ちれ秋の雲まよりくるしかすやまのみねなかるらん

鷹

月五

山の端に海のさしほ出そめて海中見よ月や秋の空

うつし見よし武蔵野をこえてあかぬかな有明の月

大山にすみすむ君に浮きなかす月の影深き月

くまもなき空にのこる月やいつまてすむらむ

出るを待ち花ぞくもらて折りしとさすらふ月の雲たれの すゑ

擣衣

流れとものしつの衣のおとつれつゝなかし麻衣か

霧

くらひなきひまやふく雲霧中なる山の嵐は

紅葉二

深すそ折り木の下露さそれぬ秋よめてくさすや

冬よ先や世ん時雨のそめし秋はいかなる紅葉かな 思色

暮秋

暮ても尽せぬあはれともよすかしなさりつる月の秋の名残哉

冬十首

初冬

冬かれ草とをれきぬ冬まさりけりさえしと

時雨

つれなさと松はあへず小村さへかくれて秋の雲らん

落葉二

冬かれに秋の名残の木の葉もみちの木の葉ちる春をまつ世

しくれつるもみちをさそふ木からしのつらさとふかな

冬月

冬木の庭の霜の風さえて月かけにやとく

霰

冬されは霰やこほる竹の中にはそのくれ竹の葉に

雪 三

袖の上まて梅は雪にかくれしかたなき花に行と

かりて人さそふ月の光と山の端をみよ雪やうつろん

雪をりてちらねやしれ梅ころちる木の葉いやとい

歳暮

くれ行くとしはまもひよりも年とそ今日まてはかなり

恋二十首

初恋

かたせて見しにうちいまやのまつひとしもまてあらはれの糸

忍恋 二

ものゆゑいとほしき袖にくれるとてぬかりかりを

世中はよはなれつるかともなかなか涙よ袖の人とはれ

不逢恋 又

人こころかれはたれにかりかつたそのいはくもくれてなにまし

あの梅人のまうれしとうらも苦しき心の思ひのまゝ来らし

おもふつとめてあれはあやなくも絶えすのけはしきに

わりふてとかゝるうひとたのむかなるかたふとまへ

いくかたやせとてうへのむらさきれけらんとするつせか

初逢恋

いつまでと[illegible]月[illegible]

暁別恋

中[illegible]

後朝恋

[illegible]

逢不会恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]世のな[illegible]

忘恋　三

[illegible]

[illegible]

恨恋

人[illegible]恨[illegible]

雑二十首

暁

[illegible]の[illegible]

松

[illegible]の松

竹

[illegible]竹の[illegible]

山

まれにみえしつくられておけのむのやとすて山かへ かな

河

あふせ川のとこの山川せきそへんすゝしき秋はこなたそ

橋

絶えはてしことおもへて世まてたりもまたいつとりんたる橋 かな

関

吹くしもあくしたかきの山風や雲もそめぬ峯たかし かな

猿 二

へうさ海よしへとて揚衣夏くりたちさ代に時ん

うたえのこしもす猿くすたてさのうたの ゆや

海路

かたしてたち風よまう世ん浮かけまちつめの舟らかせくゝ かな

山家 二

こゝろよりむすふさゝめともつめのすみまての雲霧

さすまるみ山のゆきことりすさふをしへいよふみのや かな

田家

秋風の庵守りの…のうちてもとめむきつらの世かな

述懐 二

とゝくたれおもひよせまつれなき秋はいはのしけみ

なとゝおもはれえりしこそへしてそさそやる かな

懐旧

ありきともみちさくへかりきふうちのよかとなくん

夢

程て今は若葉はあしまかにものさそあなしひを思　しはらく

神祇

神をあふくも道の心のひかりにてつゝ道なりき　すん

釈教

思ひのいとふ世のかく花も月も世を捨て　にし

祝

むかし今も治まる世の九重のちとせ千年や君　つかへり